

『ぜんぶ、猫のせい～木蘭町の謎解き事件簿～』

著:和泉 桂

ill:小椋ムク

疲れ切って帰宅した知可に、「お帰り」と育真が声をかけてくる。

知可が帰ってくる時間は育真にとって休憩時間なのか、彼はいつもここで新聞を読んでいる。猫のちびたちもそれに合わせているようで、たいていソファで丸くなっているか、育真の膝や足許にいるかのどちらかだ。

「何だ、飲んでるのか？」

「ふえ？」

アルコールが回っているようで、舌が繻(もつ)れている。

「顔が真っ赤だ」

育真は知可の不調に気づいているようだった。

「あ、うん……なんか変わったお客さんに奢られちゃって」

「変わった客？」

「久保寺さんを知ってるって言ったら、相手が急に盛り上がりちゃったんだ。今日の出会いに乾杯とか何とか言ってさ。映画の見過ぎだよね。『カサブランカ』とかああいう懐かしの映画系」

酔っているせいなのか、どうでもいいことばかりをつらつら述べてしまって、上手く話を組み立てられない。

「柘は普通のバーなのに、変わったやつだな」

育真に言われたくないだろうなと思いつつ、知可は頷いた。

「ちょっとしつこかったよ。あ……えっと、しつこいっていうか、変？ これ、くれたし」

知可はポケットに押し込んでいた名刺を手渡した。松永に渡してもよかったのだが、鷺沢の妙な迫力が忘れられずに持て余しているうちに、つい持って帰ってしまった。

「妙なやつだな。鷺沢……？ それって口実じゃないか？」

「口実？ どんな？」

「そいつ、おまえに目をつけてるのか？」

知可の問いにはまったく答えずに、育真の声が不機嫌そのものという冷ややかなものに変わる。

「目をつけられるって、べつに悪いことも変なこともしてないよ」

「そうじゃなくて」

そうでなくとも鷺沢のせいで気疲れしているのに、育真にまで絡(から)まれる理由がわからなくて困ってしまう。

でも、バイトは知可が勝手に決めたことなので、育真に不満をぶつけるのはお門(かど)違(ちが)いだ。

ここは鷺沢から話題を逸(そ)らすに限る。

「えっと、それより、明日はあっちのバイト休みだから、何か美味しいもの作るよ」

「いきなり何で？」

育真はまだ不審げな顔をしている。

何でって、育真のおかげで結羽に大事なことを伝えられたからだ。

それが彼女の希望になるのか、それとも絶望になるのか、知可にはわからないけれど、役目は果たした。

「あの子のブレスレットのことが解決できたから。そのお礼」

「お礼？」

「うん」

育真は何度か瞬(まばた)きをしていたが、返事をしない。

「食べたいもの、教えてよ」

「食べるなら、こっちがいい」

育真が手を伸ばし、知可の腕を掴んで引き寄せる。

「ん？」

思いがけないことに、知可はなすすべもなく彼の腕に落ちた。

「いく、」

言葉が途切れたのは、育真が顔を近づけてきたからだ。

熱でも測るのか？

目を丸くする知可に更に顔を接近させて。

乾いた唇が触れ合う。

——キスだ。

「な、な、な」

顔を離して真っ赤になる知可に対し、育真は「やわらかいな」と感想を述べる。

「なに、」

焦ったところで、もう一度育真が唇を重ねてくる。

嘘(うそ)だろ……？

今度はさっきよりも長かった。

自分でも何を実況しようとしているのかわからないが、キスされてて、舌でねろっと唇を舐められて、それで……。

信じ難いほどのリアルさに、耐えきれなくなって足がふらつく。

思考が真っ白になる。

育真が自分の歯茎を舌で舐めたのに気づき、知可はそこでようやく彼を初めて押(お)し退(の)けた。

「よせって！」

悶(もん)絶(ぜつ)しそうになる知可は、慌(わ)てて一歩後(あと)退(ず)さった。

はあはあと荒く呼吸を繰り返し、息を整える。頬が熱い。きっと今、耳どころかうなじまで真っ赤だ。

なのに、育真はどうして平然としているんだろう？

「…い、今の、何!? 健康チェック!？」

猫並みの扱いなのだろうか、知可は焦りながら問い詰める。

「おまえ、キスを知らないのか？」

しれっとした返事に、知可はまた悶絶しそうになる。

「知ってる、けど、た、食べるって……っ」

「悪い」

一言だけ育真は謝ってから、少し考えて言葉を選んでいる様子だった。

「食べるってのには語(ご)弊(へい)があった。味わいたい。舐めたい。いや、違うな」
どれも恥ずかしい単語で、脳が沸(ふ)騰(とう)しそうだ。
しばらく考え込んでから、育真が意を決した様子で顔を上げる。
「ああ、わかった。正確には——知りたい、だ」
「だからって、どうしてキスなんだよ！」
声の上擦り、知可はようやく唇を押さえる。ごしごしと擦(こす)ると育真を傷つけそうだったので、代わりに右手の甲を押しつける。
だが、それではよけいに育真のキスを大事にしているみたいで恥ずかしい。
もう、どうすればいいのかわからない。
こういうところで動揺しまくっているから、彼女いない歴＝年齢という情けない事態になってしまうのだ……と、知可はまったく関係ないことまで考えてしまう。
しかも、初めてのディープキスの相手が同性なんて……！
「それは……」
「も、もしかしたら、育真って、帰国子女か何か？」
「いや、違う」
どうしたらそういう結論になるんだとでも言いたげに、育真はさらりと否定した。
「それなら、何で、今の……」
育真自身も混乱しているのか、一瞬の沈黙があった。
「——とにかく、相棒とライバルのいない探偵は、探偵じゃないんだろ？ だったらその驚沢っていうやつがライバル候補だ」
「意味がわからないんだけど……」
誤(ご)魔(ま)化(か)されているような気がして——いや、完全に誤魔化されているので、このままでは納得がいかない。
ライバルって、それじゃまるで恋敵みたいじゃないか。
……恋？
いやいや、それは絶対がないから。
わけがわからないまま知可は恨みがましい目で育真を見上げたが、彼は意に介さぬ様子で肩を竦めた。

本文 p148～155 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>